「日本ケニア外交関係樹立 60 周年記念企画」
日本人と共に働いたことを通じて～経験と学び

Denise A. O. Kodhe
Media Expert,
Director General – Institute for Development and Lerdership in Africa (IDEA)

私はケニア人で、Denise A. O. Kodhe と申します。デニスと呼んでください。私には、家内と 2 人の息子、1 人の小さなかわいい娘がいます。まずは、日本人会報ジャンボ「日本ケニア外交関係樹立 60 周年記念企画」に寄稿する機会を頂けましたことを深く感謝申し上げます。私のこれまでの日本とのかかわりについて、或いは、ジャーナリストとして、日本とケニアの民間企業を繋ぐ架け橋として、日本とケニアのより良い関係の構築の為にして参りました様々な活動について、簡単にご紹介させていただけましたらと存じます。

１．日本との出会い

私と日本との関わりは、Japan Africa Culture Interchange Institute （JACII）に始まりました。そこで日本語の基本を学び、1990 年には卒業して共同通信で働いた折には、そこそこ日本語も理解できて、日本人の同僚や友人と日本語で話したものでした。残念ながら、それ以降全く練習していないので、まだまだ私の日本語レベルは下手なままですが、私のつたない日本語も日本を訪問する際、或いは、日本人がケニアを訪ねてくる際にはとっても役に立っています。私は、スワヒリ語を話す人々には、日本語より英語を勉強する方が難しいと分析しています。

1990 年に卒業後、共同通信の現地記者として、私がジャーナリストとしての活動を始め、時折、仕事で、また友人を訪ねて、或いは国際会議に参加する為に、日本を行き来するようになりました。その時感じたのは、最早言い古されたことかもしれませんが、日本で強く印象付けられたことの一つは、清潔さです。日本ではトイレだけでなく、あらゆる場所が、とても清潔に保たれており、いつも感動します。また、もう一つは公共交通システムの便利さです。日本にいる間には、JR や私鉄、新幹線などの鉄道だけでなく、バスやタクシーなどの道路交通も使用して、移動しました。驚きなのは、どの交通システムも競争が激しく、サービスのレベルの高さを考えれば、とても安いことです。

また、私が出会った日本人の方には、ケニアで慈善活動に従事する様々な篤志家の方々がいらっしゃいました。私は慈善事業家でもあり、Institute for Development and Leadership in Africa （IDEA）で社長もしておりますので、そういった観点からも、キテンゲラにあるサイディアフラハ子供の家を運営されている日本人の篤志家の方と共に慈善事業活動に従事してきたこともあり、ケニア社会にいる貧しい方々、恵まれない方々を支え助けようとする日本人の方々の善意には、深い謝意を禁じえません。ケニア人自身が、彼と同じように考えて行動できないのは残念ですが、日本人の善意は、そこだけに限らずケニア国内の、トゥルカナ、マルサビット、ムゥインギ、キスム等、ナイロビから遠く離れた地域含めて様々な場所で、医療福祉、教育、トレーニングといった様々な活動をされています。

そんなこともあり、私は深く日本に影響され、多くのことを学びました。爾来、日本とケニアの関係構築の支持者として、沢山のケニア人に日本に興味を持つよう働きかけてきました。日本人と共に旅行代理店を立ち上げたものもいれば、日本に渡航して住みついた人もいます。また、中には日本語と英語の通訳者になった人もいます。

２．ジャーナリストとしての活動

私の職業はジャーナリストでは、1990 年に共同通信の現地記者としてケニアからアフリカ全土をカバーするようになって以来、日本とケニアの関係を進展させることに力を注いで参りました。共同通信のアフリカ記者として 14 年間働いた他、毎日新聞、読売新聞、そして日経新聞の現地記者やメディア専門員としても働きました。また、ＮＨＫのドキュメンタリー制作に協力し、ケニア山麓のイテン、マラソン選手のトレーニングで有名な西ケニアのエルドレット、ンゴング・トレーニングキャンプなどで、アスリートやその他のスポーツの活動の取材をしたこともあります。

また、私は、JICA が進めてきた沢山の ODA や技術供与に関する記事も書きました。2021 年には Mwea 稲作灌漑事業のプレスツアーを JETRO の名代としてコーディネートし、ケニアのあらゆるメディアが集う前で、ある日本人の方が、MOL の抵抗した農機で稲を刈り取る作業を披露しました。Mwea と Ahero の沢山の米作農家は、お買い得で効率が良くシンプルで操作しやすい稲刈機にすっかり魅了されていました。

何年か前に同じようにプレスツアーを組み JICA 事業を通じて日本の政府が開発したプロジェクトを訪問して回りました。当時の JKCAT(Jomo Kenyatta College of Agriculture and Technology)、今の JKCAT(Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology)、ツァボの Kenya Wildlife Service、Macademia Nuts Company を訪問しました。

また、日本-アフリカのフォーラムやアフリカ連合の活動では、アフリカ連合の ECOSOCC(Economic Social and Cultural Council)の活動を通じて、TICAD でも提唱されたアジェンダでもあるアフリカと日本の間の貿易通商と開発の発展を促進する為に、様々な非政府系の事業者と協業しました。

３．ビジネスの架け橋として

また、もう一つの私の活動である、日本とケニアのビジネスの架け橋について触れたいと思います。

私は、三井物産のナイロビ支店やその他の日本企業に対して、ケニアでの投資や事業機会についてのアドバイスを提供したり、ケニア側の企業や団体との関係構築に貢献したりしています。特に地方の事業家との関係構築は日本人にとってだけでなく、ケニア人にとっても容易でなく、これは主に、ビジネスの文化やビジネスでの適切な振る舞いに対する理解がかけている方と思われます。例えば、特に汚職や贈収賄がケニアのビジネス文化から完全には消し去れていない一方で、日本のビジネスは相互理解と信用の上に成り立っています。従い、この GAP を乗り越えるためにも、2019 年に、大使公邸にて在ケニア日本国大使館、在ケニア日本商工会や私が運営する IDEA（上述）にて共催して、日本、ケニアの双方の民間企業を集め、相互に知り合うようなイベントを開催いたしました。

日本のビジネスパーソン、学者、メディアで働く人々と触れ合うと、いつも、高い主体性と責任感、仕事に対する献身・専念、組織に対する忠誠に、いつも感銘を受けます。日本人は失敗を前提としません。常に、正確さ、成功を希求する精神、そして効率性によって、責任を果たすべく前に進みます。

日本人の仕事に対する姿勢・進め方から重要な学びを得たことがあります。1998 年にナイロビとダルエスサラームの米国大使館がテロ爆弾で攻撃されることを確り確認せずに報道したことで共同通信の職を失いかけたことがありました。実際、カンパラに対する攻撃も触れた一方で、そこでは実際には爆弾によるテロ攻撃は起こりませんでした。

これらの学びから、自分の職業柄の個性や個人としての物事の進め方にも大きく影響を受けました。同僚に対しても、心底信頼できる人にのみ頼るように言っています。我々が満足感やプライドを満たされるのは、おカネやモノを対価として得られたからではなく、うまく物事を進められたこと、或いは、

一生懸命働き専念して責任を果たしたこと、に対してであるということを伝えているのです。これが日本人の働き振りから学んだことではないでしょうか。

３．日本での印象深い経験

これらの一般的なもの印象とは異なりますが、私の日本での貴重な、そして、大変な経験をお伝えしたいと思います。

一つ目は台風です。台風が東京に来たときに羽田空港に他の旅客と閉じ込められた時のことをいつも思い出します。その時には、sns を使って、日本やケニアの友人に状況を伝えるだけでなく、私の為に祈ってくれと懇願したものでした。もうこの世の終わりだと思っていたのですから。友人の Mr. Peter Odhengo は赤ちゃんみたいに泣くなと私を諭しました。どれだけ取り乱したかが分かるでしょう。私は台風一過空が晴れ渡った翌日、直ぐに日本を立ちナイロビに帰ろうとしました。次の台風が来ないことを願いながら。

もう一つの強烈な印象を与えられた経験は、2011 年に東北を訪問した時でした。そうです巨大地震と津波に襲われたあの直後です。何万人もの人々が命を奪われ、あらゆる建物や設備が破壊された、正に破滅的な出来事でした。私が訪問したときにはまだ残骸が散らばり、安全上の理由からは入れない場所もありました。私は、その辺りにある大きなひびが入っている建物に一つで宿を取りました。大きなひび割れが開口しており、外の光や動きが見えるようなところで寝ました。私は毎日新聞の特派員と一緒にいましたが、正直に申しまして、一睡もできず、恐ろしくて一晩中凍えていました。後に神戸の博物館を訪れ、もう一つの巨大災害、阪神大震災の爪痕も見ました。いずれにしても日本の災害リスクマネジメントスキルも災害対策も相当な高レベルであると思います。ケニアが災害リスクマネジメント法案や政策を準備する際、私も日本工営や世銀を通じてコンサルタントとして参画しました。その際には、ケニアは日本の経験から学ぶべきであると強く推薦しました。

４．終わりに

私の日本とケニアの架け橋としての活動は、まだ終わりではありません。これからも素晴らしい日本人の皆さんから学び、また、皆さんに協力したりしながら、少しでも両国の関係の発展に貢献できればと願っています。またどこかでお会いする日もあると思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

以　上